第３章　資料編

運営指導委員会の記録
○令和３年度第１回運営指導委員会議事録
　2021 年 7 月 15 日（木）　14 時 00 分～　於　畝傍高等学校　小会議室

（１）　開会

（２）あいさつ
学校教育課　山内課長より
・SGH ネットワークに参加し関係機関との連携を
・グローカル型事業最終年度としての総括を
・高等学校改革では、普通科の多様化がうたわれている
　（地域の課題に取り組む学科・学際的な学科など）
　→グローカル型事業は、畝傍高校だけでなく県の今後の姿を描いていく事業になる

畝傍高等学校　大西校長より
・生徒たちをどう動かしていくのか
・過去の業績に上乗せしていく「巨人の肩に乗る」
・コロナ禍をはじめとする制約の中で事業を活性化していくための運営について
・探究型の進め方はあらゆる教科に波及する→教科を超えて、すべての生徒に

（３）委員及び出席者紹介

運営指導委員：加藤　久雄、北居　明、アダルシュ・シャルマ、正木　寛、
　　赤沢　早人（欠席）
学校教育課　課長：山内　祐司
　　高校教育第二係指導主事：表　恭子

（４）事業の取組説明
【杉本】
０．報告
　・「課題研究発表会」を令和３年４月 24 日に実施した
　・第３学年のアドバンストコースの生徒が、ポスター形式で、第２学年の生徒対象に発表を行った
　・研究を進めるにあたって地域の方々から良い影響を受けた生徒が多くみられた

１．第２学年「課題研究」～昨年度の課題と今年度の取組～
①昨年度の成果と課題
・指導計画の敷設、生徒と教員の目標共有、自然科学分野の課題研究の開始、生徒の主体的なテーマ選択及び研究課題設定などの成果があった

・「伴走者」としての認識の差や、研究課題設定に対する「見えない」仕掛けづくりにおいて課題が残った
・前回の運営指導委員会では、「課題研究」と各教科の授業の接続、研究の動機、仮説への根拠の説明の補強、地域とのつながり、地域への還元などについて助言があった
②今年度の課題研究の１年間の流れについて
③今年度の課題研究講座編成の工夫について
・原則クラスを単純に３分割　（テーマで分けない）
・物理、化学、生物実験室希望者は事前に一つのグループにまとめる（理科グループ）
・１つの講座の中に、異なる教科・科目の教員、少なくとも１人は昨年度の授業担当者が入る

④今年度の課題研究について
・１人１テーマ　自分の関心領域から「問い」をたてる…課題解決型、価値創造型
・自分なりのものの見方＋ 動機 ＋理由（客観的根拠）
・自分事として考える、自己のキャリア設計へ
・振り返り　＋　フィードバック（自己評価、他己評価、意識調査）
・問いを具体化させる過程における視点（ローカルとグローバル）

２．第１学年　次年度に向けた取組
・日常の気づき（当たり前を疑う）⇒「気づきノート」作成・活用⇒「研究ノート」へ※BYOD の導入も視野に

・「探究」に関わるオンライン講演会の実施　⇒　生徒、教員で目的の共有
・「課題研究へのアプローチ」（夏休み学年課題）　⇒　次年度実践に向けて
・コンソーシアム機関等による出前授業（２学期）　⇒　ローカル　＋　グローバル

３．地域との協働（アドバンストコースの取組について）
・「課題研究」のスケジュールに沿いながら、研究課題について意見交換、中間発表会
・「公開講座」の受講（コンソーシアム各機関、地域人材の招聘)→レポートの作成
・ 学習発表会・WWL 生徒発表会（令和４年１月頃）への参加
・ 海外 FW　⇒　国内 FW　⇒　県内 FW
・ STEAM プログラムの受講
・ 選択者による課題研究発表会(令和４年４月下旬)
⇒実際に体験、体感（生の声を聞く）することでローカルとグローバルの視点をもつ

４．次年度以降の「自走」にむけて
①課題研究」に関わる校内体制の強化

・生徒が「自分がどのように生きていくか」を考える機会に
（時間・場所を限定せず、課題に向き合い考える）
・教員も従来の実践を見直す機会に
（正解に辿り着く力　＋　答えを創り出す力）
②地域との協働
・今年度までのコンソーシアム機関　＋　地域人材
　⇒本校が地域社会の中で果たす役割の検討

（５）運営指導委員会設置要項説明
【表】
・運営指導委員会の設置要項について

（６）委員長選出
【表】
・加藤委員長に決定

（７）協議
【北居】
・組織的な体制がどうなっているのか、特定の教員の負担が大きくならないような仕組みづくり、教科を超えた連携が必要である
　→１つの講座に必ず前年度担当者が含まれているという体制はよい
・課題研究が目的ではなく、自分がどのように生きていくのかを考えさせる活動にすべき
・「問い」を作り出す力が重要。「問い」がおもしろければ研究もおもしろくなる
・屁理屈のするどさを教員はファシリテイトすればいいのではいか

【正木】
・課題研究のアプローチ…事実と意見をわけて述べる　というのが素晴らしい
　→自分の意見を客観的に見ることができる。
　　新たな「問い」が生まれ、さらに掘り下げていくことができる
・質問：課題研究と、各教科の接続の例はあるか
【杉本】
・答え：教科で学習した内容の有用性を実感することができる
　　教科書の記述をスタートとして「問い」を立てることができないか
　　教科の授業で出た話題を、課題研究のテーマにしようとする生徒もいる
【シャルマ】
・SGH のときから関わっているが、発展していると感じる
・英語教育、国際理解教育のサポートをしている立場からみると、なぜ学生から質問がないのか？意見を言わないのか？と感じていた
・北欧では、教員の机が後ろにある（＝ファシリテイター）このようなかたちが畝傍高校でも実現できればいいと考える
・生徒たちと直接話がしたい

【加藤】
・「問い」が重要
・先が見えない閉塞感のなかでこの事業を進める素晴らしさと大変さ
・課題研究と教科の学びは別次元だと考える教員がいてもいいかもしれない。運営側はアンテナを張る必要はあるが
・なぜ〇〇を勉強しないといけないのですか？というような素朴な質問を受け付ける雰囲気をファシリテイターがつくる。生徒からの質問によって授業が空中分解したり、授業進度が遅れたりしても、最後はゴールインするから大丈夫、という自信を教師が見せる
・A 先生、B 先生、C 先生が居たら、それぞれの教育観に多様性があっていいのではないか。『課題研究のアプローチ』で示された例は、それぞれの先生の教育観のひきだしにどう入るのか、と考えてもらう
・STEAM やリベラルアーツは、日本の高校生の受けている教育とどのようにちがうのか
・課題研究に一生懸命取り組めば、テストの点数も上がる、ということになればいいのではないか

【正木】
・ラーメン屋の話で、「なんで」と掘り下げるのはクリティカルシンキングといえるのでは

【北居】
・価値のないものから価値を見出す＝価値のないものの特性を細分化して、他のものの特性と組み合わせる力
→こういうことができる人は起業家向き

【加藤】
・価値がないものはない＝インクルーシブなまなざしにも通じる

【北居】
・そもそも価値とは相対的なものであり、これに価値を持たせているものがある

【加藤】
・このような経済の話は日本ではまだタブーになっている

【大西】
・価値について、高校では倫理や経済で軽く扱う程度である
・高校でリベラルアーツは学ぶべきか

【北居】
・リベラルアーツを学べば、進路のミスマッチは防げるのではないか
・得意科目や成績で大学選びをすると、入ってからのモチベーションは低くなりが

ちである
・経済学と経営学の違いもわからずに入学してしまう不幸は防げるのではないか

【シャルマ】
・リベラルアーツより、グローバル教育
・外国にいくだけではなく、地域にいる多様な人々とかかわることもグローバルな活動
・地域のグローバル社会でリーダーシップをとれる人材の育成に期待している
・日本の社会について説明する力をもつ人材を育成してほしい

【正木】
・シャルマさんとほぼ同じ　他者を理解する

【加藤】
・リベラルアーツとは何か、に対する答えは難しい
・レイトスペシャリゼイションが重要なのではないか（自分の専門はゆっくり決める）
・スピード感のある人にスポットを当てすぎであり、好きなことをゆっくり学ぶ人を評価できないか

【シャルマ】
・息子はアメリカの高校で本当のゆとり教育を体験した

【加藤】
・日本では教師は展覧会で見どころを解説してしまうが、外国ではどの展示物が一番面白かった？それについて調べよう　と展開する。否定することがなく、すべて肯定する
・課題研究に取り組んだ生徒が、卒業後、地域に戻って還元してくれることに期待する
・学習指導要領と ESD は双子の兄弟である
・震災からの復興はユネスコスクールが早い…探究型の学力がついているのではないか

【シャルマ】
・ファシリテイターになって、どう思いますか

【杉本】
・自分で考えて自分の考えを述べることを難しく感じる生徒は多い
・なんとなくおいしい、などの発言がどんどん具体化されていく変容は教員からみてもおもしろい
・言語化が難しいだけで、考えていない生徒はいないので、ファシリテイターとしての役割を果たしたい

・1年生の生徒が書籍のポップを作成する授業→2年生も関心をもつ
・卒業生の動向について…学習机をテーマとした研究がビジネスグランプリで評価→同じ部活動の後輩もアドバンストコースを志望→本年度もビジネスグランプリの本校向け講座を開催予定

（８）連絡
・第2回は2月5日（土）を予定している。

（９）閉会のことば
　学校教育課　山内課長
・畝傍高校の自走の仕方、県立高校でも新学習指導要領がスタートする
・「自分事」がキーワードである
・「学習された無力感」を突破する
・アントレプレナーシップ

（１０）閉会

○令和３年度第２回運営指導委員会議事録
2022 年 2 月 5 日（土）　13 時 30 分～　於　畝傍高等学校　小会議室

（１）　開会
（２）あいさつ
開会のあいさつ
・実施校校長　大西校長より
　コロナ禍における行事の変容　できる限りの実施
　生徒の探究活動は教員にとってどうであったか、が事業分析の鍵となるのでは
・学校教育課　山内課長より
　SGH を基礎にして研究を進めてきた
　４月が新学習指導要領のスタート　教科横断的な学び、BYOD 等
　その新たな取り組みに、畝傍高校は先駆的に行っているということになる
　本取り組みのまとめとして、今後を見据えてご助言・ご意見をいただきたい

（３）委員及びご出席者紹介　＊敬称略
運営指導委員：加藤久雄、アダルシュ・シャルマ、正木寛、赤沢早人（ご欠席）、
　　北居明（ご欠席）
学校教育課　：山内祐司、　辰巳理恵子

（４）事業の取組説明
【杉本】
0.　初めに
昨年度の課題研究「振り返りレポート」抜粋
→調べるほどに自身の無知に気づいた
→自分の興味関心を自覚することがこんなに難しいと思わなかった
→課題の設定を身近なものに、いかにテーマを自分ごとにできるか
→自分が本当に知りたいことを見つけるのが課題研究の醍醐味である
①　第２学年「課題研究」に関わる取り組み
・経緯と目標
　『奈良発！未来を創造するグローカルリーダー育成プログラム』
　課題　：生徒の主体性、教員の体制⇒グランドデザイン、ルーブリック、「俯瞰力」
　　教科を超えた協力体制づくり（教科担当者会議）
・運営～教員の「目線」合わせ
　重視するもの：生徒の主体性、課題に迫る過程の充実、新たな問い
　　動機(客観的根拠)、自分ごととして考える、振り返り＆フィードバック
　取り組み：講座の編成（２クラス６講座）、ワークシート（昨年度から精度をあげて）、研究ノート、自分でチェックできるような仕組み、多数の出典から情報収集
・第１学年の取り組み
　「気づきノート」作成・活用、探究に関わるオンライン講座（LHR にて）、出前授業実施

「課題研究へのアプローチ」（夏休み学年課題）⇒ ものの見方・考え方を鍛える

②コンソーシアム各機関及び地域との協働について

地域との協働

１特別公開講座：

末永幸歩氏、藤本弘道氏、反田恭平氏、JICA、在日アメリカ大使館、京都大学学びコーディネータ、MICE 推進室等

２企業訪問：

UNWTO 駐日事務所、株式会社ペーパル、Design Setta Sango 等

３グローバル探究プログラム、グローカル型探究オンライン発表会、WWL 課題研究発表会

③３年間の成果と課題及び展望

成果：ルーブリックに基づく評価、生徒の主体性、自然科学分野の課題研究、コンソーシアム機関や地域との連携強化

課題：教員の「伴走者」としてのスキルアップ、課題研究と教科の接続

課題研究をどのように地域へフィードバックするか、グローバルな視点の育成機会の創出

（５）運営指導委員会設置要項説明【辰巳】

目的

本事業の効果的な推進に資するため、専門的見地から指導、助言について意見交換を行う

（６）ご指導、ご助言、協議

【加藤】

・教員（大人）が探究している姿勢を見せることが大切、生徒にも伝わる

・２０数年間の探究（卵のふ化について）をしてきた教員の例、探究心を持つこと

・「教員」「コーチ」「インストラクター」「伴走者」の違い

→伴走者：『私もわからない』と言える関係、答えの出ない気持ち悪さに向かっていける

【正木】

・常に伴走者である必要はないのでは→場面によっては先駆者であってもよいのでは

・教科と探究は接続させる必要はないのでは。しかし、あまりにかけ離れすぎると保護者の理解を得られない？

→探究の経験を生かして教科のレベルアップにつなげる、学ぶ姿勢を備える

【杉本】

・教科、教科書の内容に疑問を抱く、本当だろうか？と思う生徒がいてもいいのでは

【シャルマ】

・生徒たちが自分でテーマを見つけてくることの素晴らしさ

・課題研究により教科学習の時間は短くなる、などの声はあるか
【杉本】
・学習時間が短くなったという声は届いていない
・課題研究への取り組み姿勢は個々によって差がある
【シャルマ】
普段の学習とは異なる学びの時間
【杉本】
取り組みがきっかけで、授業の受け方が変わったという生徒の声（ノートのとり方が変わった）
【加藤】
・ 教科と探究の接続について、内容的に直接つなげる必要はないが・・・
・教科書で学んだことをきっかけに探究テーマにつなげる面白さ
・生徒たちの独自の研究は、大学に入ってみるとそれが扱われている学問に出会える
・内容ではないつながりは教員が把握しておく（教科学習では育めない力がある）
　例）外国の人が日本のアニメが好き→「頑張る」主人公が好き→中国で「おしん」が人気
　　→電車を待つ日本人の姿、スクランブル交差点での日本人の動きに注目する
　　（もう一歩掘り下げる力←探究学習で育む力）
・学びを地域にどのようにフィードバックしていくか、について
　自分には何ができるか、ということを考える←探究活動の成果
　行動の変容に結びついているか（新学習指導要領　前文）
　畝傍の金看板に
【正木】
・生徒たちが「楽しんで研究している」様子が素晴らしい
・自分たちに今できることは何か、を探っていることが進歩である
【加藤】
・ワークシートの改善について
　複数の出典→比較、思考を促す仕掛け
　何かの研究結果を探究→研究結果から独自の何かを探究
・SDGｓにおいて、当然扱うべきなのに扱えていない目標を発見するような生徒
・様々な方にアドバイザリーボードをお願いする、HP 等で発信する（縁を財産に）
【シャルマ】
・このプロジェクトの過程の大変さ、レベルアップの過程
・自分の地域に関心を持つこと、知らないことには何も進まない
・発表から質問を通してさらに研究が深まる、今後につながる機会
【加藤】
・課題を見つけるのは地域の人、課題を最もうまく解決できるのも地域の人
・「地域主体」を認識する
・自分ごとにして、行動を変容させる
・「これをやらなかったどうなってただろう」というイメージをしてみてほしい
（課題研究をしない畝傍高校はどうなってた・・・？）

【シャルマ】
生徒たちと教員との話し合いの場はあるのか
【杉本】
否定や、善し悪しの判断はしない
「どうしてそのテーマにしたの？」という問いかけを与える
教員同士で課題研究の話題は昨年度より増えてきた
【シャルマ】
現代の学生はインターネットから情報を得る傾向にある
【杉本】
高校生はインターネットで調べる習慣がある
情報の真偽を疑う目をもってほしい
【富田】
インターネット普及以後の情報は得やすいが、それ以前のデータは出てこない
危惧すべきは、データが存在しないものは「ない」と判断してしまうこと
【加藤】
デジタル化していないデータはインターネットに引っかかってこない
非常に危険
【正木】
データの根拠や、なぜそのデータが出てくるのかまで考える姿勢を
【加藤】
Google が世界の全てではないという認識
【シャルマ】
Thinking out of the box
このプロジェクトは区切りを迎えたが、今後どのように取り組みを続けていくか
外国とつながる、世界を広げる
【加藤】
・日本は試験の点数を中心に人を見る、自分の意見を述べる力を中心に人を見るようにしたらどうか、というドイツの方の意見
・ESD は SDG s の母、ESD を進めるのに「教科書」がなかった。
　教科書がないことをどのように推し進めるか
（７）連絡
・　特になし
（８）閉会のことば
・学校教育課　山内課長より
　運営の方々へ御礼
　新年度、新学習指導要領に向けて舵をきろうとしている
　畝傍高校の今後に向けて
・大西校長より
　今後の高等学校が目指すべき一つの方向性
　探究と従来の学びとの接続
　主体的な姿勢、行動の変容
（９）閉会